

あの頃、僕は

つ次郎

「それ、一緒に読んでたやつだ」

神田が引つ張り出した児童小説を見て、日比谷はそう言った。

「懐かしいね。これで演劇みたいな遊びなんかもやってた」

「読んでる仲間がいなくて、二人で何役も演じたりしてたよな」

神田はしばらくページをばらばらとめくって、今度はアルバムを引き出した。日比谷も次の思い出の品を探す。そのうちに部屋の隅のバッグに目をとめた。数年前に、お揃いと言ってぶら下げたキーホルダーに気づき、まだ付けてくれてんだ、と少し照れくさそうに言った。外す理由がなかったから、と言って神田は顔を背けた。

ざあざあと雨音が響く。

アルバムを眺めながら、神田はふいに笑った。

「なんだ、どうした？」

「いや、修学旅行の時のさ、あんたが木刀持ってる写真があつて」

男の夢なんだから笑ってくれるな、と冗談めかして日比谷が言う。

「でも、うちのクラスで買ったの山崎くんとかあんただけだったよね」

「ああ山崎、あの時分かり合えるのは俺たちだけだった……」

今でも元気かな山崎、と日比谷はつぶやいた。

「しかしお前、身長も髪も伸びたなあ」

感慨深げに日比谷が言う。

「そりゃ、三年も経てばね」

「はじめに見た時、悔しいけどお前だつてわからなかったもんな。想像してた以上にロングも似合つて……」

「それ以上はやめて、嬉しいから」

「ごめんごめんと言いなながら、日比谷は心底楽しいと言いたげな笑みをたたえる。

二人は、次の記憶を探す。

「お前、今は数学大丈夫なのか？」

本棚を物色しながら日比谷が言う。

「あんたがいなくなつてからはなおさらダメ。あの頃が恋しい」

「いつも俺が教えてたから……その代わり英語はお前に習つてたけど」

「宇宙語にしか見えないとか言つてたね」

「英語の授業中はずっと宇宙のこと考えてたな。そうすれば宇宙語が理解できるかと思つて」

「そんなんだからダメだったんでしょ。あんたは、今の英語は……いや、なんでもない」

しまった、と思つて神田は口をつぐむ。日比谷は次に言うことを探していた。

「そりゃ、お前の高校ってどんな感じなんだ？」

「ああ、結構いいところだよ。受験でうまくいった分、勉強は大変だけど。いい友達が多いし、購買はおいしいし……」

そのうちに、神田は日比谷の知らない、高校での出来事に話を移していた。その顔に陰りはなく、日比谷はそれをやわらかな表情で見つめていた。

神田が語り疲れたころ、雨は勢いを弱めていた。わずかな雨音の中で、日比谷の姿は薄らぎはじめていた。

「——ああ、ごめん。そろそろ、お別れみたいだ。俺がいなくてもお前が楽しそうで、安心しちゃったからかな」

神田の瞳が揺れる。

「ごめんな、きつとこうなるつてわかつてただけけど」

「いいよ、私だつてそう気づいてて声かけたんだから。」

——それに、未練をなくして成仏できるなんて喜ばしいことですよ」

「ああ、そうかもな。お前は俺にあるか？ 未練」

そりゃもうあんたの墓と添い遂げたいくらいに未練たらたらですよ、と神田が返す。そりゃ嬉しいな、と日比谷が笑う。

「なあ、……お前は故人のことなんて忘れてくれていいんだぜ。早く自由になるんだ。そうやって新しいひとを見つけていくんだ。それを俺も望んでるから」

神田が、唇を噛む。その癖は変わんないな、泣いたつていいんだぜ、と日比谷が消えかかった声で言う。神田はゆっくりと頷いて、涙をこぼした。

「さようなら、お前のおかげで確かに幸せだった。お前もどうか、幸せに——」

言葉を結ぶ前に、日比谷を感じることはできなくなつた。部屋には、雨上がりの光が差し込んでる。

「バカだな、そんなこと言われたら余計に忘れられなくなるじゃん。でも……頑張るよ」

神田は開いていたアルバムに手を伸ばそうとして、もう約束する気ないじゃん、と自嘲した。ただのいい思い出として胸の内にとどめて前に進めれば許してくれるかな、とつぶやいた。